

妹尾河童 せのおかつぱ

少年H

上卷



妹尾河童せのあかつば

少年H

上卷



講談社

妹尾河童 (せのお・かつば)

1930年神戸生まれ。グラフィック・デザイナーを経て、1954年、独学で舞台美術家としてデビュー。以来、演劇、オペラ、ミュージカルなど幅広く活躍中の日本を代表する舞台美術家。「紀伊國屋演劇賞」「サントリイ音楽賞」「芸術祭優秀賞」「兵庫県文化賞」ほか多数を受賞。またエッセイストとしても知られ、ユニークな細密イラスト入りの『河童が覗いた〜』シリーズの『ヨーロッパ』『インド』など話題のベストセラーの著書も多い。本作品『少年H』は、著者初の小説。

N. D. C. 913 360p 20cm

少年H しょうねんエッチ 上巻

定価はカバーに表示してあります。

第一刷発行 一九九七年一月一七日

第二十二刷発行 一九九七年二月三日

著者 妹尾河童 せのお かつば

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社 講談社



〒112-8001 東京都文京区音羽二―二二―二
出版部 〇三―五三九五―三三〇五
販売部 〇三―五三九五―三六二二
製作部 〇三―五三九五―三六一五

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 島田製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上の例外を除き禁じられています。

日本音楽著作権協会（出）許諾第9650653-702号

少年H

上卷

目次

赤盤 あかばん の兄 にい ちゃん	6
タンバリン	20
オトコ姉 ねえ ちゃん	34
ナイフとフオーク	48
二銭糊 にせんのおり	62
地図 ちず と卵 たまご	76
愛 あい	90
海の子	104
水害 すいがい	118
『三つの宝』 たから	132
アラヒトガミ	146
日独伊三国同盟 にちどくいさんこくどうめい	160
軍事機密 ぐんじきみつ	174

紀元二千六百年	きげん	188
『不可侵条約』	ふかしんじょうやく	202
十二月八日		216
踏み絵	ふみえ	230
隣組	となりぐみ	244
防毒マスクとスパイ	ぼうどく	258
汽車の旅	きしゃのたび	272
夏休み	なつやすみ	286
欲しがりません勝つまでは	ほしがりませんか	300
神戸二中入学考査	こうべにゅうがくこうさ	314
カミケル号	かみけるごう	328
田森教官	たもりきょうかん	342
Hの家の周辺地図	しゅつへんちず	356

おことわり

この本は総ルビに近いほど、漢字という漢字にルビをふりました。大人の人には、煩わしいでしょうが、勘弁してください。昔の本には、こんな風にすべての漢字にルビがついていたお蔭で、ぼくは大人の本を読むことができたし、漢字を覚えることもできました。

ぜひ少年少女にも読んでほしいという思いをこめて、昔のような本にしました。寛容な心でお許しください。

——妹尾河童

装丁

妹尾河童

装画「神戸須磨の海と雲」

妹尾太郎

少年日

上卷

赤盤あかばんの兄にいちゃん

「君きみはセノオ君くんやね」と、町の中で見み知らぬ小父おじさんにいわれて、少年はギクツとした。

「なんでボクの名前なまえ知しってるの？」と、不思議ふしぎがつて尋ねると、

「君の胸むねに書いてあるがな。名札なふだつけて歩いてるようなもんやからな」と小父さんは笑わらった。

少年は小学校しょうがっこうの一年生のときから、胸に「H. SENO」の文字もじを編あみ込んだセーターを着きせられていた。

母親ははの敏子としこが、自分じぶんの息子むすこのセーターに文字もじを編あみこむことを思いついたのは、アメリカから送おくられてきた横文字よこもじの宛名書あてながきと、手紙てがみの中に入いっていた写真しやしんを見たからだ。その写真には、胸に文字が書いてあるセーターを着た女性じよせいが写うつっていた。

その人は、キリスト教きりすとうの宣教師せんきょうしとして神戸こうべにいたことがあったミセス・ステープルスという婦人ふじんで、お洒落しやれ感覚かんかくも拔群ばっぐんだったので、敏子あこがの憧れの人でもあった。

親したしく付き合あっていた人が、文字入りのセーターを着て笑っている姿すがたは、懐かしさなつしよと一緒にいっしょになつて素敵すてきに見えた。

外国人の多い神戸の街でも、昭和十二年頃にそんなセーターを着ている人はまだいなかった。敏子は、思いたつとすぐ実行し熱中するたちだったから息子に同じようなセーターを編んで着せたくなり、さっそく H. SENO とローマ字で大きく書いたわけだ。

焦げ茶色のセーターに白文字で編みこんだので、その文字は遠目にも目立った。母親の得意さとは逆に、少年は他の子どもたちが着ているものとはあまりにも違うのが恥ずかしかった。

その上、胸に自分の名前が大きく書いてあることを知ってからは、かなり参っていた。

「もうイヤや、胸に名前を書いたのは着とうない。『肇』の H だけにしてよ。H の一文字だけやったら多くの名前わからへんから」

と訴え、三年生になってから「H」の一文字にしてもらうことにした。

H という文字は、鉛筆に刻印されていたから、誰もが読める身近な横文字だったので、友だちから、たちまち「エッチ」という仇名で呼ばれるようになってしまった。

H の家は洋服屋だった。神戸に住んでいる人には、「鷹取駅を海のほうへ降りた本庄町六丁目目の洋服屋」といえば地図なしでもすぐにわかった。

『高級紳士服仕立 妹尾洋服店』という縦長の大きい看板を二階の軒からぶら下げていたこともあるが、他に洋服屋がなかったからだ。

『高級紳士服仕立』を名乗ってはいたが、バス通りに面した普通の民家で、住まいと一緒の小さ

な店であつた。

須磨の静閑な屋敷町に近い地域だったが、妙法寺川の東側のこちらは、そんな住宅地とはかなり違つていた。市場やゴム工場もあつたし、商店や飲食店、風呂屋や鉄工所が住居と混在する下町だつた。

町の雰囲気は隣接する須磨地区とまったく違つてはいたが、「山と海に近い」という共通する環境には同じように恵まれていた。

Hの両親は、教育には熱心だったが、「勉強は晩御飯のあとですればええ」といい、太陽が出ている昼間は、子どもの遊び時間だと思つていた。お蔭で、学校から帰つたらすぐ山や海で遊ぶことも干渉されず自由だつた。とにかくHは、毎日忙しく遊び回つていた。

Hが遊び場にしていた山はすぐ近くにあつた。中でも北へ四キロメートル登れば頂上に着く鷹取山は、子どもたちが「ぼくらの山」と思いこむほど親しい遊び場だつた。

海も、家から南へ三百メートルいけば砂浜だつたから、文字どおり「ぼくの海」であつた。だから、夏休みの期間は、午前中は山に登り、昼から海で泳ぐという毎日だつた。

Hは、特に海での遊びが気に入つていた。家から褌をしめただけの裸で飛び出し、街の中を走つてそのまま海に跳びこんでいた。

「こんなこと、須磨のボンボンにはでけへんやろう」とますますご機嫌になり、「ぼくらの街

はええなあ」と思っていた。

他にも、お屋敷町の子どもが羨む遊び場がたくさんあった。鷹取駅の北側にある機関車の操車場には、さまざまな機関車が煙と蒸気を吐き出しながら動いていたし、ライジングサンの石油タンクへの引き込み線がある原ッパは、格好の野球場だった。

「ライジングサン」というのは、もとオランダとイギリス資本の石油会社で、引き込み線は、船で運ばれてきた石油を、備蓄したタンクから運びだすための鉄道の線路だった。貨車が入りするのは朝と昼の二回だったから、原ッパで遊んでいる子どもたちは列車が来るときだけ気をつければよかった。それも、近ごろは貨車が通る回数が減って、ごくたまにしか通過しなくなったので、日たちにはますます都合のよい遊び場であった。

「貨車があまり通らんようになったから、光つつたレールもだんだん錆びてきたよ」

と炭屋のオツチャンにいうと、彼は小声で、

「支那との戦争が長引いとるからや。石油が減つてきとるいう証拠やが。これは軍の秘密やから人にはいうたらあかんぞ」といい、ちよつと恐い顔でうなずいてみせた。

日 は、「軍の秘密」やなんてオツチャンはいつも大袈裟なウソをつくんやからと思った。

炭屋のオツチャンの店は、お好み焼き屋でもあった。夏になると、「炭屋」は「氷屋」に変わって、店先に「氷」と書いた旗がひるがえっていた。「かき氷」の季節になると、オツチャン

の店は、風呂^{ふろ}歸^{かえ}りの子どもたちの溜^たまり場になり賑^{にぎ}わった。

もの知りで、話が面白^{おもしろ}いオッチャンは、悪^{わる}ガキたちの人気^{にんき}者^{もの}だった。でも子どもたちはあまりオッチャンの話を信用^{しんよう}してはいなかった。よくホントみたいなウソの話を混^まぜたからだ。

炭屋^{すすきや}のオッチャンだけではなく、近所^{きんじよ}にはへんな人が多かった。男^{おとこ}か女^めかわからないお兄^{にい}さんや、自転車^{じてんしゃ}で走りながら大声^{おおこゑ}で歌^{うた}う「うどん屋^やの兄^やちゃん」。いつも「天皇^{てんのう}陛下^{へいか}のため」^にといっている。在郷^{ざいこう}軍^{ぐん}人の小父^{おじ}さんや、子どもを見ると「あつちへ行^いけ！」と竹竿^{たけざお}を振^ふり回^{まわ}して追^おいはらっている。玩具^{おもちゃ}の弓^{ゆみ}屋^やのオヤジ」などがいた。

Hが一番^{いちばん}好き^すきだったのは、大通^{おおどお}りを挟^{はさ}んだ斜^{なな}め向^むかいの、「うどん屋^やの兄^やちゃん」だった。

近所^{おとな}の大人^{おとな}たちは、「東京^{とうきやう}から来^きた人^{ひと}らしい。出前^{でまえ}にしては賢^{かしこ}そうやけど、何者^{なにもの}やろ？」と不思議^{ふしぎ}がつていた。

兄^やちゃんは「うどん屋^やの親戚^{しんせき}だ」と自分^{じぶん}ではいつていたが、小母^{おぼ}さんに聞いてみると、「知り合^あいの息子^{むすこ}や。親戚^{しんせき}やないけど、元氣^{げんき}よう配達^{はいたち}してくれるんで評判^{ひやうばん}ええから、ずっと住^すみ込んでもうてるのや」といった。

うどん屋^やの兄^やちゃんは、たしかに言葉^{ことば}がへんだった。神戸^{こうべ}の言葉^{ことば}を話^{はな}そうとしていたが、ときどき東京^{とうきやう}弁^{べん}がまじるので、Hは「ヘタクソやなあ」とからかった。

兄^やちゃんは、出前^{でまえ}に行くとき自転車^{じてんしゃ}に乗り、歌^{うた}をいつも大きな声^{こゑ}で歌^{うた}いながら走^{はし}っていた。

Hはそれが好きだったのだ。彼の歌う声が聞こえると、急いで自転車に飛び乗り兄チャンの後を追いかけた。

でも、Hの自転車の乗り方は妙な格好だった。大人用の中古を買ってもらったので足が届かず、足を横から入れてペダルを漕いでいたからだ。それでもけっこうスピードが出たので、兄チャンの後ろにくっついて、負けずに走りながら歌った。

Hの家では、学校唱歌と賛美歌の他は歌ってはいけないうことになっていたので、声を出すのは家をかなり離れてからにした。「風の中のー 羽のようにー いーつも変わるー 女心ー」と、兄チャンと一緒に大声で歌うのが楽しかった。ある日、

「そんなに歌が好きなら、晩ごはんがすんだら部屋へおいで。レコードを聴かせてやるわ。でも誰にもいうな。見つからんように来い」と、兄チャンがいった。

Hは風呂屋に行くといつて家を出て、表通りを風呂屋のほうへ向かってかなり歩いてから、路地に入りぐるっと回って、裏口からうどん屋に入った。入るとき一度ふり返って、誰にも見られていないかどうか確かめた。

調理場の中には、誰もいなかった。天井からぶらさがった薄暗い電球が、仕事が終わってガランとした部屋をボンヤリ照らしていた。Hは、ちよつと気後れしながら、初めて見る店の裏側が珍しく、あちこち覗き回った。

うどんを茹でる釜が二つ並んでいて、その周囲はまだ温かった。鏝だしの匂いがある大鍋があったので、Hは蓋を開け中の汁を舐めてみた。まだ味つけていなかったのか、あまり美味しくなかった。

「こら、なにしたらんや」二階から降りてきた兄チャンがいったので、Hは慌てて水道の栓をひねって手拭いを濡らした。

「風呂へ行くいうて出てきたから、濡れてないとおかしいやろ」というと、兄チャンはHの頭を叩く真似をしながら、「お前は知能犯やなあ」といった。

Hは「チノウハン」という意味がわからなかったが、褒められたのだと思って、「ちよつとだけやけど」と照れ笑いをした。

兄チャンの部屋は、階段を登ったすぐ左側の三畳間でとても狭かったが、本棚にたくさん本とレコードが何枚も並んでいた。

「コラ、そんなにキヨロキヨ調べるな。コーヒー飲むか？　ちよつと苦いけど……」

と兄チャンが聞いてくれたので、Hは大人扱いされた気がして嬉しくなつて、「ぼく苦いの平気や、飲む」といった。

実は、Hの家ではいつも紅茶で、まだ一度もコーヒーを飲んだことがなかった。

兄チャンは笑いながら、棚から箱を取り出し黒い豆を入れゴリゴリと挽いた。なんだかタバ

コのような匂においがしてきたので、Hは少し心配しんぱいになったが平氣へいきを装よそおった。

一口ひとくち飲んだコーヒーはとても苦かった。「どうや、おいしいか？」と聞かれたので、Hは、

「何回なんかいか飲んでニガイのに慣なれたら、好きになると思う」と答こたえた。兄チャンは、

「何回も飲まれたらかなわん。無理むりに好きになってもらわんでもいいよ」といいながら、手回てまわしの蓄音器ちくおんきのハンドルをぐるぐる回し、一枚のレコードを大事だいじそうに乗のせた。

「これがいつも歌っているのが入っている藤原義江ふじわらよしえのレコードや」

兄チャンが、レコード盤ばんの上にそつと針はりをおくと、しばらくシャーシャーという音おとがしていったが、突然とつぜん男の人の歌声うたごえが聴きこえてきたのでHはビックリした。

「えつ、ヨシエいうのに男の人やったの？」

「女やと思おもっていたのか。藤原義江という有名なオペラ歌手かしゅのテノールで、もちろん男の人だよ。〃風の中の羽うのように」というのは、オペラの中の有名なアリアなんだ」

「アリアってなんや？」

「オペラの中で歌う、氣持きもちちのいい歌のことだよ」

Hは、本當ほんとうに氣持きもちちがよくなるなあ、と思おもった。

三回も四回も繰くり返かえしにかけてもらっているうちに、

「いいかげんにしてくれ。レコードが擦すり減へつてしまいうじゃないか！」

と、兄チャンが東京弁で不機嫌そうにいった。Hはまだ家に帰りたくなかったので、

「ほんなら、他のをかけて」とせがんだ。兄チャンは、

「この藤原義江のレコードは、アメリカで吹き込んだ『赤盤』というやつで、普通のレコードよりもうんと高いんだ。日本人で赤盤の歌手はこの人だけなんだよ。じゃ、『出船の港』というのをかけてやろう」といいながら、蓄音器のハンドルをぐるぐるまわした。

「この歌は古い歌？」とHが聞くと、「君は何年生まれだ？」といわれ、「昭和五年」と答えると、

「これは昭和三年の発売だから、君はまだ生まれてなかったね」と兄チャンが教えてくれた。

レコードから「ドンとドンとドンと波のり越えて」と聴こえてきたので、

「ぼくこの歌知ってるよ。このアリアもいいなあ」とHが得意げにいった。すると兄チャンは、

「これはアリアじゃないよ」と笑った。

他に『荒城の月』や『ちんちん千鳥』という歌もかけてくれた。

Hはアリアとそうでない歌とどこが違うのかわからなかったが、「藤原義江という人はウマイなあ。いろんな歌が歌えるんやね」と感想をのべると、兄チャンは嬉しそうに、

「よし、わかるんならまた聴かせてやる。そのかわり、ここへ来たこともレコードを聴いたことも誰にもいふなよ」といった。

「うん、ダレにもいわへん。指きりしてもええ」と、Hは小指を立てた。